様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成２５年６月１３日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：若手研究（B）
研究期間：２０１１～２０１２
課題番号：２３７２００５３
研究課題名（和文）　中国南北朝時代における「道教」礼拝像の形成と展開
研究課題名（英文）　Formation and development of Taoist images of worship during the Southern and Northern Dynasties in China
研究代表者
齋藤　龍一（SAITO RYUICHI）
成城大学・民俗学研究所・研究員
研究者番号：７０５７３３８５

研究成果の概要（和文）：
本研究は、中国で生まれた宗教「道教」における礼拝対象の偶像=道教像について、美術史研究の視点で関連作品の調査と考察を試みたものである。
具体的には、道教像の萌芽期にあたる中国南北朝時代(5-6 世紀)における、その出現の過程と各地域における造像の展開について考察した。その上で、主尊像の特徴的な持物である座具の一種「凭几」や払子である「麈尾」を手がかりに、道教像に明確な地方性が存在していたことを多くの作品を比較検討する中で明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study investigates and examines images for worship, such as ‘Taoist’ statues, whose religious origins were in China, from the viewpoint of art history. In particular, this study analysed the emergence process of Taoist statues and their development in each region during the Southern and Northern Dynasties (5th–6th centuries), which was known as the era of origin of these statues in China. On the basis of this analysis, we point out a clear association that existed in Taoist statues by comparing many works, focusing on a kind of Chinese armrest called ‘pingji’ and a kind of duster called ‘zhuwei’, which are characteristic attributes of the principal image.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、芸術学・美術史
キーワード：中国美術、道教美術、礼拝像、道教像、石造彫刻、中国南北朝時代

１．研究開始当初の背景

道教は老子を祖として崇め不老不死を究

極の目標とする、中国で生まれた最大の宗教であり、現代に至っても中国のみならず東アジアの思想や芸術・文化のベースとなっている。しかしながら、仏教美術やキリスト教美術については広範かつ詳細な美術史的研究がなされているのに対し、宗教美術としての道教美術に関する研究は、日本や欧米のみならず中国においても十分といえないのが現状である。

道教美術研究は古くて新しい分野である。そもそも道教の美術に関する研究の先鞭をつけたのは東京美術学校の岡倉覚三[天心]や大村西崖であり、中国や欧米に先行しまず日本に於いてはじめられた。

しかしその後、道教の美術作品を対象とする研究は長らく停滞することとなる。戦後1950 年代に入り、松原三郎による道教像に関する専論が続けて発表されたものの、これに追従する美術史研究はほとんどみられなかった。その要因としては、道教の思想的宗教的難解さや、仏像に比して道教像は作品数自体が少ないこと等が考えられよう。

1990 年代になると神塚淑子が道教史の立場から道教像に注目し、各像の銘文を読み解く研究を発表し道教史研究者の大きな注目を集めた。またこの頃より、中国国内においてもようやく道教文物に目が向けられるようになり、李松をはじめとする研究者により今なお多くの作品が現存していることが明らかとなった。

このように道教「礼拝」像に関する研究は、その中国における所在情報の探索と、銘文解読を手がかりとする道教史的問題提起が主であり、本研究の提示する造像の様式と形式の詳細な検討による美術史研究からのアプローチはきわめて少ないのが現状である。

２．研究の目的

本研究は、中国で生まれた最大の宗教である「道教」における礼拝対象となる偶像=道教像を対象とするものである。

道教像の萌芽期にあたる南北朝時代(5-6世紀)におけるその出現と展開・変遷・地方性の諸相について明らかにし、これまであまり注目されることがなかった美術史研究における新たなジャンル「道教の美術」の構築と発展に寄与することを目的としている。

３．研究の方法

(1) 展覧会「道教の美術」(齋藤龍一編『道教の美術』図録、大阪市立美術館・読売新聞社、2009 年)において作成した道教関連作品データベースを底本とし、近年中国で刊行・発表が相次ぐ数多くの道教美術に関する図録・報告書及び論文を収集した上で、現存する南北朝時代道教像のデータベースを作成する。

(2) 日本国内の美術館・博物館及び個人所蔵の関連作品を調査する。あわせて中国において、河南省をはじめとする各地に赴き、今なお現地に所在する関連作品の調査を実施する。

４．研究成果

(1) 道教像の分布

南北朝時代に属する道教像の現存分布は、主に陝西、山西、河南、四川の四地域であり、大半が北朝の領域である。南朝領域での出土例は、同時期の仏教像と同様にきわめて少数にとどまっている。また道観をはじめとする

道教礼拝施設の遺構等は発見されておらず、具体的にどのような空間に礼拝像が祀られていたのかは判明していない。

① 陝西　陝西省西安とその近郊より、丸彫りされたいわゆる単独像、あるいは石材を縦長の立方体に成形し四面に造像がなされた四面像が共に数多く発見されている。現存最古の道教像(5 世紀末)も同地域から出土した作品である。なお四面像では道教像のみならず、ひとつの石材に仏教像と道教像とが合わせて彫出された仏道混交像が含まれるのは、同地域の道教像固有の特徴といえるだろう。

② 山西　山西省における主な分布地域は、陝西省と河南省に接する、古代より河東と称された西南部(運城市附近)であり、単独像、四面像共に現存している。代表的な作品として、『山右石刻叢編』に銘文が掲載される西魏大統十四年(548)銘蔡氏造像碑(芮城・永楽宮所蔵)がある。調査により、同地域では大型の道教像が西魏・北周・隋と造り続けられていたことが明らかとなった。

③ 河南　河南省では洛陽および偃師などに、いくつかの四面像あるいは碑像が所在している。代表的な作品に、北斉道民大都宮主馬寄造像碑(洛陽博物館所蔵)がある。本像の正面には上下二つの屋形龕並び、それぞれ道教三尊像が表されている。

④ 四川　四川省では、成都や綿陽など成都盆地を中心にいくつかの作品が現存している。このうち成都では西安路の道路工事に際して窖蔵が発見されたが、そのなかに一軀の道教像が発見された。本像は総高 60cm ほどの単独像で、南朝・梁(502-57)頃の制作と推定されている。

(2) 主尊像の持物

南北朝時代を中心とする道教像のうち、主尊像の代表的な持物(アトリビュート)には麈尾と凭几がある。

麈尾とは鹿の尾を団扇状に束ね柄をつけたものであり、いわゆる払子のひとつである。仏教においては僧侶が威儀を示すために手に執る威儀具のひとつと位置付けられ、古代中国では高貴な人物が権威の象徴として用いたり、竹林の七賢に代表される隠者が清談の際などに手にしていた。道教像に先行する持物表現としては、『維摩経』に説かれる維摩居士像にみることができる。

また凭几は体をもたれさせる脇息のことで、具体的な形状としては腰を支えるように天板が弓なりに湾曲し、三脚のものを指している。これは古代中国で生まれた座具であり、東晋～南朝墓からは明器として模型の凭几も出土している。また魏・晋～北魏の墓室壁画に描かれた墓主男性像などの描写から、凭几は単に体をもたれさせる道具ではなく、男性が威儀をただす際に用いる重要な持物であったことが理解される。道教像に先行する凭几の持物表現としては、麈尾と同じく維摩居士像にみることができるのは興味深い点である。こうした持物の類似性から、道教礼拝像のすがたは維摩居士像と密接な関係があることは明らかであろう。

(3) 道教像の地域性

上記の持物を手がかりに、道教像の地域性について検討を試みた。まず第一に大きく区分することができるのは、凭几の有無についてである。陝西は現存最古の道教像が発見され、また最も多くの道教像が現存する地域であるが、その大部分の作品では主尊像が凭几を伴わないという図像的特徴を有している。調査した限りでは、凭几を伴うのは北周頃の制作と考えられる碑像(西安碑林博物館所蔵)など数例であり、隋・唐以降の作品には

凭几をみることが多くなっていく。

現存最古の道教像はもちろんのこと、陝西北部宜君県に所在し、西魏大統元年(535)に開窟された仏教・道教の尊像が併せて造られた仏道混交石窟である福地石窟の道教像においても、凭几は表されていない。それに対し陝西を除く山西・河南・四川の各地域では、もっぱら凭几が表されていたようである。このことから陝西の地域的特徴として、凭几を伴わない道教像の伝統が北魏～西魏と長く保たれていたと考えられるだろう。

次に、山西・河南・四川に分布する凭几を表す道教像の相違について検討を試みた。山西西南部は先に示した蔡氏造像碑などから、少なくとも西魏頃より凭几を伴う道教像を造り続けていたことが明らかとなった。

また、河南・四川では現在のところ、蔡氏造像碑に先行する制作年代の道教像は発見されていない。これらを持物に着目して詳細に検討したところ、河南では、山西・四川と異なる形状の凭几が表されていることを確認することができた。すなわち北斉道民大都宮主馬寄造像碑では、正面の上下龕共に主尊像の凭几は両端が長く且つ上方に伸びているのである。

一方で、南朝領域にある四川の凭几を表す道教像については、凭几に形状は山西のそれとほぼ同様であるが、しかしながら麈尾の持ち方に四川の独自性を見出すことができた。すなわち四川以外の地域にみられる道教像では、凭几の有無に関わらず麈尾は片手で執るのが通例であるが、これに対し四川では麈尾をやや傾けて両手で執るのが特徴となっている。

以上のように、四地域に分布する南北朝時代の道教礼拝像について、その主尊像を詳細に検討するなかで造像そのものの地域性を明確に浮かび上がらせることができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

齋藤龍一、大阪市立美術館山口コレクション中国仏教・道教彫刻について、日本中国学会第 64 回大会、2012 年 10 月 7 日、大阪市立大学。

〔図書〕（計１件）

齋藤龍一、リーフレット『―道教像の出現とそのすがた―』、2012 年 9 月、6 頁、本科研費による制作。

６．研究組織

(1)研究代表者

齋藤 龍一（SAITO RYUICHI）

成城大学・民俗学研究所・研究員

研究者番号：70573385